

無用の用としての 雑学と雑談のすすめ



文学部・文学研究科 池上 知子

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
これから皆さんは、長い人生の中でおそらく一番輝かしく楽しい時間を過ごされることと思います。私は、学部卒業後、大学院に進学しましたので、かれこれ十年ほど学生として大学で過ごし、三〇歳を前に大学教員として職を得て、今日に至るまで三〇年あまり教壇に立つてきました。その間、さまざまな出来事に遭遇し、幾度となく人生の転機を経験しましたが、大学で過ごした時間、とりわけ学部時代の四年間は、今、振り返っても特別な時間だったと思います。当時の体験が私の心の原点になっているといっても過言ではありません。その理由を二つほど挙げます。皆さんのこれからの大学の過ごし方のヒントになればと思います。

学問知との出会い

私の専門は心理学ですが、大学入学当初から心理学を専攻しようと思っていたわけではありません。私の場合、具体的に明確な目的意識をもって大学へ進学したというよりは、大学という世界への漠然とした憧れ、そこへ行けば何かが見つかるかも

アン ロゾ Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No. 18

タイトル“Un roseau(アン ロゾ)”
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

新しい仲間たちへ



理学部・理学研究科 保尊 隆享

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
受験という試練を無事乗り越えられたことをお祝いするとともに、知力・体力・気力が最も充実したこの時期に学ぶ場所として大阪市立大学を選ばれたことを、1教員として心から歓迎します。

これから市大で過ごす数年間は、皆さんが一生の中で最も劇的な変身を遂げる期間だと思います。皆さんは、今までは、様々な分野で先人たちが獲得蓄積してきた知(智)、すなわちknowleage。あるいはwisdomについて勉強し、吸収する立場でした。入学後は、単にそれらを受け入れるのではなく、積極的に利用して、それぞれが興味を持つテーマの解明に活用することを学び、体験します。私たち教員から見ると、はじめは教室で相対していた皆さんが、やがてこちら側に来て、私たちの仲間として一緒に議論し、また研究するようになっていきます。その到達点としての卒業研究、さらには大学院での研究では、大小はともかく、それまで世界の誰も知らなかった新しい事実を明らかにすることができず。すなわち、皆さんは、市大で過ごす数年間に「知(智)の消費者」から「知(智)の生産者」へと、180度立場を変えるわけです。

しれないといった淡い期待から進学したというのが正直なところ。昨今の進路指導や大学選択のあり方からすれば、けつしてほめられたことではないかもしれませんが、私が高校生のころは、オープンキャンパスなどもなく、そもそも大学というところが、どのようなところかあまり想像することもできませんでしたが、そこには広大で深遠な知の世界が広がっているのだから勝手に思い描いていました。

はたして、入学してみると、高校までとは趣の違うさまざまな授業科目が用意されており、具体的な予備知識を持っていなかった分、新鮮に感じたのを記憶しています。とりわけ、一般教養科目は、個性豊かな先生方がそれぞれ自由な語り口で最新の学説や自説を熟く講義されていたのが印象的でした。一般教養科目とは、本学の全学共通教育科目にあたるもので、当時も大学に入学した最初の一年は、学部の専門科目とは別にこれらの科目を人文、社会、自然の各分野から相当数履修することになっていました。「日本民族はどこから来たのか?」「蝸の目には世界はどのように見えているのか?」「自己が溶解するとはどういうことか?」といった含蓄のある授業、「源氏物語を原文で読むために、まず万葉仮名を覚える」といったこだわりのある授業など、内容も多岐にわたっていました。また、外国語科目も必修でしたが、これらの授業も教材としてとりあげている作品に対する担当の先生の思い入れが強く、なかなか個性的でした。何のためにこれらを学ぶのかということについて特に説明を受けた記憶はありませんが、私は、ただただ自分の知的好奇心を満たしてくれるもの

として授業を楽しんでいました。そして、授業で知ったさまざまな本を興味の赴くまま買って読み漁っていました。語学はどちらかといえば好きではなかったのですが、必修の英語とフランス語に加え、ロシア語も履修していました(ロシア語は単位を取得できたかどうか定かではありませんが)。高校までに学んだ英語以外に新しい外国語を学べるのは、知らない国にかけ異文化体験するようなくわくわく感がありました。

私は歴史学や文学、生物学の専門家になつたわけではありませんので、上記で学んだ内容が現在の仕事に何かしら役に立っているかといえば、「いいえ」と答えるでしょう。また、フランス語やロシア語もほとんど使用することはありません。けれども、無駄なことをしていたという後悔は少しもしていません。むしろ、受験や就職のためといった外圧のないところで、単に面白そうだからという純粋な動機で新しい世界を知る喜びを満喫できたことに感謝しています。これらは、いわば雑学かもしれませんが、これら雑学の中に人生の妙味を知る手がかりが隠されていることが多いです。もちろん、雑学は大学を出てからも続けられますが、若いときの原体験がその基盤となっていくのです。

仲間との出会い

私は、学部時代、多くの時間をクラブ活動にも費やしました。私が入学した大学は、本学と同じ総合大学でしたので、キャンパスには理系、文系のさまざまな学部の学生があふれており、クラブに入るとこうした多様な分野の学生と知り合うことができました。出身地も北は北海道から南は九州まで広範囲にわたって

何を学ぶか

立派な「知(智)の生産者」に変身するためには、どうしたらよいのでしょうか。何よりも大事なことは、基礎をしっかりと身につけることです。専攻する分野、具体的には学部や学科によって、基礎の種類や範囲は異なりますが、基礎が大事な点は共通です。しっかりとした基礎がなくては、応用も発展も学際もありません。特に語学や数学に関しては、学ぶべきタイミングがあります。それは正に今です！皆さんの先輩の多くが、大学を卒業して社会に出てから勉強不足を後悔しています。私自身、定年までの年数を数えるようになった今でも、英語の論文を書くのは億劫ですんなりと始められませんが、もう少し数学が理解できていたらと痛感することもあります。在学中に、このような学問の基礎をぜひ自分のものにしてください。

もう一つ大事な点は、皆さんが本当に身につけるべきは知識や技術そのものではなく、それらを得るための科学的(論理的)な見方、考え方、発想の仕方、理解の仕方、あるいはアプローチ・手段の見つけ方であることです。知識や技術は、過去に得られた成果の一次的なまとめに過ぎません。皆さんがそれらだけを必死に吸収しても、学術の変化・進展の速いこの時代では、あつという間に陳腐化してしまいます。

私の専門は生物学ですが、かつてのマクリントック博士の動く遺伝子や、2016年のノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典先生のオートファジーの研究のように、既存の知識では予想もし得なかったことに生命現象の本質がある

例が多々あります。また、「獲得形質が遺伝する」という概念は、かつてはイデオロギーとも結びつけられて徹底的に批判されましたが、分子生物学の発展によりエビデンスが分子生物学の実態が説明されて、条件によっては起こり得ることが広く認められるようになりました。このように、知識の味はどんどん変化しています。

私たちは、今、膨大なジャンク情報の海に生きています。間違つた情報ほど伝播しやすい、という報告があるように、その中から正しい物事を見抜き、理解するのは決して容易ではありません。えせ科学は、しばしば科学的なポーズを纏っています。専門分野や文系・理系を問わず、在学中にぜひ論理的、客観的な思考方法、正しい視点を養ってください。

どう学ぶか

それでは、具体的に、大学でどう学んだらよいのでしょうか。まず、自分でよく考え、自らの意思・判断を持つて主体的に学ぶことです。最近、中央教育審議会などで「アクティブ・ラーニング」という言葉がよく使われており、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法、と定義されています。この言葉は「教育手法」を指すものとして使用されることが多いようですが、重要なのは「学修者が能動的に」という部分です。大学での学びは、皆さん自身が主体的に行うものです。その点で、今までの受動的な学び方から180度姿勢を転換する必要があります。皆さんが主体的に学ぼうとして臨めば、講義形態はどうであれ、大きな成果が得られます。

皆さんは、入学式の前から既に、履修

ました。教育学部で心理学を専攻していた私にとっては、法学部や経済学部、理学部や工学部、医学部や薬学部、そして文学部の学生は、自分の所属する学部で知り合う学生とは、発想や価値観がずいぶん違うなと感じました。クラブは、学生が自主的に年間の活動計画を立て運営していました。皆、それぞれに個性が強く活動方針をめぐりぶつかることもありました。また、先輩、後輩、同輩という縦横の人間関係が複雑に絡みあい、恋愛や友情をめぐって確執もありました。合宿では夜通し噂話に花を咲かせたもので、ふだんもクラブ活動が終わると数人くらいで誘い合わせて一緒に食事をしたり、授業の合間の空き時間に学食に行けば、たいていクラブの誰かがそこにいて、たわいもない世間話に興じていました。けれども、こうした雑談を通して、互いの本音が聞けたり、意外な事実を知ることもしばしばありました。私の大学院時代の指導教授が、ときどき「雑談は大事だよ」と話されていたのを思い出します。このような仲間との交流の積み重ねが、社会性や人間性を培うよい機会になっていたように思います。

考えるとなかなか決心がつきませんでした。当時も大学院への進学は将来への大きな不安を伴うものであり、また高学歴の女性に対する周囲のまなざしは今よりかなり冷やかなものだったからです。そのようなある日、毎日鬱々としていた私の心中を察したのか、一人の友人が学食で食事をしていて私のところにふらりとやってきて、「人と違う生き方をするのをおもしろいかもしれないよ。」と励ましてくれたのを今でもよく覚えています。その友人は同じクラブの知り合いでした。

さいごに

このようにお話しすると、大学というところは、雑学と雑談をしていけばよいのかと誤解されるかもしれません。いうまでもなく、大学は、志望した学部において専門分野の知識と技能を体系的に学び、一人ひとりが、それらを直接、間接に活かせるような道を見出すための準備を行うところなのです。しかし同時に大学は、人生においてもっとも自由に時間を過ごすことができる場所でもあります。その時間をどのように使うかによって自分という人間の幅と奥行きを増すこともできます。そのためには、遊び心もち、無用の体験を大いにしてみることも大切です。本学には、それが可能な環境が用意されています。

池上 知子（いけがみともこ）

1956年生まれ
1984年 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学、博士（教育学）
現在、文学研究科教授
専攻分野/社会心理学
全学共通教育の担当科目、「心理学への招待」

科目の選択と essay の履修登録を通して、その一端を経験しています。それをさらに発展させて、自分の学問的な興味をどんどん追究し、また視野を広げる学修の機会を積極的に求めてください。大学は、学びたければ好きなだけ学べる所です。市大は、そのような皆さんのニーズを満たすに十分な環境、設備、そして何より優れた教授陣を備えています。安心して勉学に励んでください。

もう1点、今までの「効率」重視から「経験」重視へと、学び方をやはり180度転換する必要があります。知識を得るための学習、特に受験勉強では、効率が重要でしょう。しかし、論理的、客観的な思考方法は、そのような学習では決して身につけません。できるだけ多くの経験を積み、無駄な体験もしながら、各々が自身の中に刻み、蓄積してゆく必要があります。大学では様々な機会が得られますから、それらに積極的にチャレンジし、大いに失敗してください。これこそ、今しかできないことなのです。

どう活かすか

現在、社会の流れが大きく変わりつつあり、それに伴って学術研究の進め方も変化が見られます。例えば、生物学では、以前は個人や研究室単位で独立して行う研究が中心でした。しかし、現在は、情報・データはもろろん、生物試料や研究手段まで、皆が共有して研究を進めることが常識となっています。複数の国の多数の機関に所属する研究者が集まって共同研究を行い、数十人単位の共著者からなる論文を発表することもまれではありません。さらに、学術分野の垣根を超えた共同研

究も活発になっていきます。私は、現在、元宇宙飛行士の土井隆雄京都大学特定教授とともに、有人宇宙学の活動を行っています。人類が宇宙において持続的な社会基盤を作ること、を究極の目的としたこの活動には、生物学、医学はもとより、理学、農学、工学、そして人文・社会科学・芸術に至る幅広い分野から、非常に多くの研究者が参画しています。このような様々な人たちが協力して研究を進めなければなりません。日頃、人間関係の煩わしさを避けて自分の研究に逃げ込みがちな私にとって、これは決して容易ではありません。多角的な視野と自由で柔軟な発想が求められます。

共有化、共同化、学際化、そしてグローバル化の流れは、今後ますます加速すると思います。皆さんがその中で生きて行くためには、市大で過ごす数年間にできるだけ幅広い分野の学問を学び、できるだけ多くの人、特に考え方やバックグラウンドが異なる他分野の人たちと交流しながら経験を積み重ねて行くしかありません。それができるこれから数年間を大切に過ごし、卒業の日には、晴れて真の意味の Educated person として旅立られることを期待します。

保尊 隆亨（ほそんたかゆき）

1955年生まれ
1980年 東北大学大学院理学研究科博士後期課程退学、理学博士
現在、理学研究科教授
専攻分野/植物機能生物学・宇宙生物学
全学共通教育の担当科目、「生物学への招待」